

## 『般若心経』について（十）

野口圭也（種智院大学客員教授）

### Ⅲ. 『般若心経』の内容について（7）

#### 15. 「是大明咒（mahāvidyāmantra）」について

一般的には、「明（ヴィドヤー-vidyā）」を智慧・知識の意味に取って、「大いなるさとの真言（中村元・紀野一義訳、『般若心経・金剛般若経』p.15）」「大いなる知の真言（立川武蔵訳、『般若心経の新しい読み方』p.9）」「大いなる明知による真実のことば（宮元啓一訳、『般若心経とは何か ブッダから大乘へ』p.129）」と訳されています。しかし「明（vidyā）」ということばには、「知恵」「さとり」「学問」「知識」といった意味の他に、「まじないの知識」あるいは「呪文」という意味もあります。ここでも、「真言（マントラ mantra）」と複合語になって、「偉大な呪文である真言（真実のことば）」、あるいは両方の意味を汲んで「偉大なるさとの智慧にして呪文である真言」と解釈しました。

#### 16. 「真実不虛故。説」について

中村・紀野訳のサンスクリットテキスト（p.186）では、「真実不虛故」の句の前にピリオドを置いて前の「能除一切苦」と切り離し、次の「説般若波羅蜜多」につなげていますが、これは間違いです（和訳の方は正しくなっています）。立川訳の漢文の読みでは「故」を「説」につなげていますが（p.5,7）、これもやはりうまくありません。「これこれしかじかの真言であって、背かないので（不虛故）真実であると知るべきである」という文にしないと、意味が通じません。チベット語訳はこの通りになっています。

サンスクリット文では、命題を先に述べ、次にその理由を「～であることによって」と記す表現がしばしば用いられます。ここも「真言」と「真実」を共に単数主格の形で出し、「（これこれしかじかの）真言は真実である。」と、主格+主格の名詞文でまず命題を述べます。その後、理由を述べる時の一般的な用語法である「抽象名詞の奪格形」という形によって、「背かないことによって」と、この命題が成り立つ理由を述べているのです。

#### 17. 「般若波羅蜜多咒即説咒曰」について

この部分の「般若波羅蜜多」は、サンスクリット文では「処格」の形になっています。処格とは、動作が行われる時間や場所を表すときに用いられる形です。一般的には「～において」と訳されます。中村・紀野訳では「その真言は、智慧の完成において」と訳しています（宮元氏はこれを「まったく理解できない訳文」と評しています。前掲書P.133）。

これに対して最近では、処格には単語の意味を示す用法がある（辻直四郎『サンスクリット文法』p.284）ことから、「般若波羅蜜多を意味する真言（立川訳）」・「般若波羅蜜と同じことを意味する、真実のことばとしての呪文（宮元訳）」と訳される例もあります。ただ私は、この用法は注釈文献の場合のものと、かつて習った記憶があるので、これでホンマにええのかな、という気もしています。

処格には、「話す」を意味する動詞と共に用いて間接目的語を表す、という用法もありますので（『サンスクリット文法』p.282）、「般若波羅蜜多に対する[呼びかけの]真言が説かれている。」と、試みに解釈してみました。

#### 18. 最後の真言「揭帝 揭帝 般羅揭帝 般羅僧揭帝 菩提 僧莎訶」について

この真言はすべて、サンスクリットの音を写した音写語です。始めの揭帝は、「ガテー

gate」ということばです。これは文法的にはgatiまたはgatāの呼びかけの形（呼格）、またはgataの単数処格形と考えられます。ただし、文法的に不正規である可能性もあります。gataとは元は「行く」を意味する動詞語根gamの過去分詞形で、「去った」という意味の形容詞、そこからさらに「去った者」を意味します。gatāはgataの女性形です。またgatiは、「行くこと」「道筋」「生存の状態（趣・「六道輪廻」の「道」に相当）」と言う意味の名詞です。

中村・紀野訳ではgatāの単数呼格で取り、「往ける者よ」と訳し、「完全な智慧（prajñāpāramitā）を女性原理とみなして呼びかけたのであろうと解せられる」と注記しています（pp. 36-37）。prajñāpāramitāという語は女性名詞です。同時にgataの単数処格とする解釈も挙げて、「往けるときに」という訳も付けています。立川先生もまた女性形gatāの呼格としてとらえ、「行きたる者（般若波羅蜜多）よ」と訳しています。gatāの呼格で取った場合は、いずれもgatā＝「行きたる者・往ける者」＝「般若波羅蜜多」と解釈しています。

これに対して宮元氏は、「『般若波羅蜜』の本当の意味をかんがえますと、般若波羅蜜が彼岸に往ってしまった、というのは、どうにも理解のしようがありません」と、gatāの呼格とする解釈を斥けています（前掲書p. 135）。また「『プラジュニャパーラミター』（女性名詞）を、そういう名の一種の女神で、宇宙の根本をなす女性原理を指すとする人もいます。しかし、そういう名の女性原理が登場するのは、七世紀以降、（鳩摩羅什や玄奘も知るよしのない）本格的な密教が興ってからのことですから、やはり無理があります」とも述べています（同）。

その上で、「往くこと」を意味する名詞gatiの呼格の形ととらえ、「往くことよ」と訳出します。「そう解して訳してみて、どうでしょうか、何の不思議もないように、わたくしには思えます」とまとめています（同）が、どうでしょうか。わたくしにははかなり不思議な訳に思えます。「往くこと」という動作に対する呼びかけをしなければならない必然性が、果たしてあるのでしょうか。

わたしはこのことばはgatāの呼格であり、女性名詞であるprajñāpāramitāへの呼びかけと解します。特に、prajñāpāramitāを「智慧の完成」という抽象的な理念ではなく、より具体性を帯びた呼びかけの対象として尊格化してとらえ始めているのではないかと思います。宮元氏が指摘するように、「一種の女神」とされるようになるのは密教成立以降だとしても、prajñāpāramitāが「般若菩薩」として女性の尊格となっていく、その端緒と考えることは可能だと思います。宮元氏は『般若心経』の成立を大乘仏教の初期としますので、その時点では尊格化されたprajñāpāramitāへの信仰というのを認めるのは困難でありましょう。私はもっと時代が下がってからの成立と考えていますので、prajñāpāramitāの尊格化が生じ始めてもおかしくはないと思います。もちろん、後世に見られるような明確な尊格化された般若菩薩としてではなく、その端緒となるような段階、ということです。呼びかけているうちに、徐々に独立した人格化・尊格化されるようになっていったのではないのでしょうか。

もう一つの可能性があります。真言の部分は文法的に不正規な形が登場します。bodhiという語も、呼格としては不正規です。正しくはbodheとなります。gateもまた、男性形または中性形のgataの単数呼格の不正規形と考えることも不可能ではありません。仏教文献（特に大乘経典）のサンスクリットにおいて、この形はあり得ます。もし男性形であると考えれば、これは「向こう岸に去った者」であり、「涅槃を究竟した者」であり「阿耨多羅三藐三菩提を得た者」であるブツダに対する呼びかけであると理解することが可能になります。いずれにせよ、この真言に対してはまだまだ検討の余地がありそうです。